

【特別講演1】 第2席

「明治前日本鍼灸史概説」

京都 長野 仁

演者は、昨年の第1回大会で、吉田流という一派の鍼灸流儀書を通じ、織豊期から江戸前期における日本鍼灸再興のあり方について研究発表した。しかしその後の研究で、実は“鍼灸再興”ではなく“鍼術新興”という表現の方が、当時の時代意識をより正確に描写し得、さらにこれは我が国特有のあり方ではなく、中国本土の意識変革を如実に反映した現象であることに気付いた。したがって、もう一度このような視点から日本鍼灸のあり方を捉え直し、我々に残された遺産である鍼灸古文献を正確にときほぐし、現在に活かす一助としたいと考える。

鎌倉期：惟宗時俊『続添要穴集』、惟宗具俊『医談抄』、梶原性全『頓医抄』『万安方』

室町期：樵青斎洞丹『煙蘿子針灸法』、著者未詳『耆婆五藏経』、谷野一栢『越前版難俗解』、度会常光『管蠡草灸診抄』、曲直瀬道三『鍼灸集要』

織豊期：明・雲海士→朝鮮・金徳邦→桑名玄徳；雲海士流『鍼要集』、著者未詳『灸法』著者未詳『新刊針灸指南』

江戸期：饗庭東庵『経脈發揮』、著者未詳『針灸拔萃』、著者未詳『主治針法』、山本通玄『鍼灸枢要』、渡辺東伯；無分流『合類鍼法奇貨』、松沢浄室→宮田友閑；妙鍼流『妙鍼流愈経偶人図』、方円斎→柳川靖泉；柳川流『鍼科發揮』、高津敬節『鍼灸遡洄集』、矢野伯成『鍼治枢要』、宮本春仙；宮本流→目黒道琢→藍川慎『穴名搜径』『鍼灸甲乙経孔穴主治』

我が国の“鍼術新興”の胎動は鎌倉期にみられる。よって通史的立場は採らず、その上限を中世・鎌倉期とする。これら鍼灸書個別の傾向から時代意識を抽出し、立体的に組み立てて“鍼術新興”のあり方を検証・概説したい。